

豊かな人間関係を築き、高め合う学習集団の育成をめざして — 確かな児童理解に基づいた学級マネジメントとは —

石原 峰子

すべての学校教育活動の基盤となる学級集団は、子どもたちにとって自己有能感を育てる学習の場であり、心地よい人間関係のある安心できる生活の場でなくてはならない。このような学級集団は、互いを認め合い高め合うことのできる「学習集団」であるといえる。この「学習集団」の中で、子どもたちは自己肯定感を高め、前向きな意識をもつことができる。その意味で、学級を「学習集団」に育てることは最も重要な教育活動であり、そのための学級経営の方法を追究することは意義深いことだと考える。

第1章 学級集団を「学習集団」へ

第1節 「学習集団」に育てる

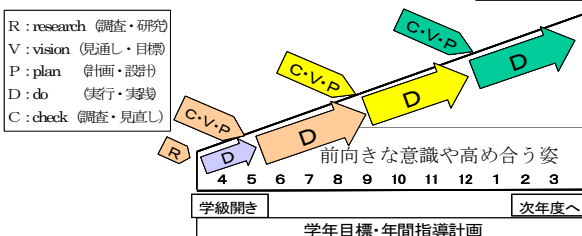
学習集団の「学習の場」や「生活の場」では、子どもたちの自己肯定感や自己有能感などの豊かな心を培い自分自身の将来に対して展望をもつことができると考えられる。本研究では、学級経営でめざす子どもの姿を、個々の育ちと人間関係とでとらえた。そして、前向きに学ぶ力と互いのよさを認め合い、高め合う人間関係こそ学習集団における子どもの姿であるとした。つまり、自分の存在価値を肯定的にとらえることができるような人間関係と居心地のよい生活環境をつくるのが学習集団を育成するための条件であると考えた。

学級が、子どもたちの学ぶ力やポジティブな意識をはぐくむ場になっているかどうかを確かめながら、学級づくりをしていかなければならない。

第2節 学習集団を育てる学級マネジメント

本研究でいう「学級マネジメント」とは、子どもたちの学びや人間関係の実態、個々の意識の現状を的確につかみながら、必要な取組を計画して実践していく学級経営のことである。図1のように、期間ごとに状況をとらえながら取組を改善していく過程をマネジメントと考えたのである。

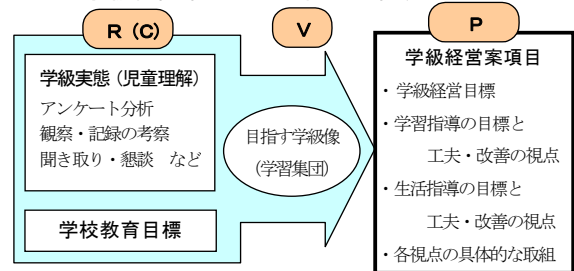
図1 学級マネジメント イメージ図



学級マネジメントをしていく上で、共感的・受容的に子どもを受け止めることは最も大切なことであるが、本研究では、子ども理解のための観点を設問の要素としてアンケートを作成した。その回答結果やその他の指導上の資料や情報、担任としての見取りや判断を合わせて、子どもたちの受

け止め方や意識の様子を分析する。さらに、そういった子どもの意識の背景を推察し、個々の課題を受容的に理解することで、学級の実態に即した学級経営案を立てる(図2)。そして、期間ごとに取組の成果や課題を明らかにしながら、取組計画を改善(P_{2,3}), 実践(D_{2,3})していくのである。

図2 学級経営案作成の過程と内容項目



今回、京都市立小学校2校で、第4学年、第6学年の学級に実践をお願いした。その学級マネジメントの実践については、「学習の場」を第2章、「生活の場」を第3章で述べる。

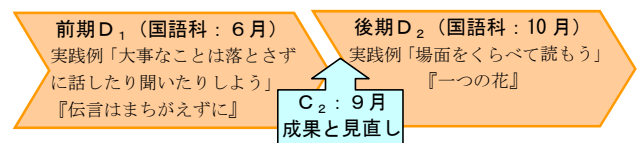
第2章 考えを交わし、学びを深める

第1節 4年生の学び合い

担任は、アンケートの集計結果から学級の課題を次のようにとらえ、国語科の学習指導でのねらいとした(図3)。

- ・ 学習内容に関心をもって意欲的に取り組む
- ・ 自分の考えをもって話し合いに参加する
- ・ 認め合う喜びを感じ、学ぶ自信をもつ

図3 4年1組での実践(D₁・D₂)と確かめ(C₂)



学習指導では、「聴き合い」によって友だちの多様な考え方や人の思いに触れることで、学び合う楽しさを感じられ、子ども同士のよさの認め合いができるような授業展開を心がけた。

第2節 6年生の学び合い

学級担任は、学級の実態から学習に関わる課題と目標(めざす子ども像)を次のようにとらえた。

- ・ 自分の考えをもち、進んで交流する子
- ・ 人の考えを受け止めようとする態度を身に付ける子
- ・ 物事を多面的にとらえ、広く深く考える子
- ・ 学ぶ喜びや意義を感じ、進んで学ぼうとする子

これを踏まえて、学習指導における具体的な取組を、図4のように社会科を中心に実践した。

図4 6年2組での実践(D₁・D₂)と確かめ(C₂)



子どもたちは社会科学習を通して、多様で多面的な考えに触れてより深く考えることを学ぶ。自分と異なる考えを拒絶したり排除したりするのではなく、そこに価値や意味を見出そうとする態度は、学習集団として必要な資質であるといえる。

第3章 協働の種から、豊かな人間関係を

第1節 4年生の仲間づくり

4年1組では、子どもたちの人権意識を高めようと、係活動を活性化するような取組をした。“みんな遊び”などでは、もめごとが絶えなかったが、解決に向けた話し合いを積み重ねていくうちに、自分本位だった子どもたちが、友だちに配慮した考えを出し合うようになった。また、担任は、給食当番や掃除当番で、子どもと一緒に汗を流すことにした。きれいになった教室をともに喜び子どもたちの労をねぎらうと、子ども同士でも認め合う態度が見られるようになった。このように、係・当番活動は、学級への所属感や有用感を得る機会になる。子どもたちが個性を埋没させることなく、学級の生活や文化に貢献していることが自覚できたなら、大きな喜びを感じるだろう。

第2節 6年生の仲間づくり

担任は、子どもたちに、互いを思いやることの大切さや受け止め合うことの喜びを実感させ、学級の中に温かい人間関係や信頼関係をつくりたいと願って経営プランを立てた。そして、その目標に近づくためにも学校行事への主体的な参加を促した。友だちと目標や課題を共有し、話し合いや工夫を重ね、協力して取り組んでいくことで集団としての資質を高めていくという働きがあるからである。運動会や学習発表会などの取組で、子どもたちの学級に対する所属感が高まり、様々な協働を通して連帯感も強まっていくであろう。

第4章 信頼のネットワークをつくる

第1節 子どもとつながる

子どもの日記や学習ノートにコメントを書く際に心がけたのは、子どもの思いに共感的・受容的に応えることであった。また、できるだけ子どもたちの側で過ごすようにし、交友関係に目を配り、つぶやきにも耳を傾けることにした。こうして、子どものこころの声を受け止めることは、子どもを理解するために大切なことだが、時として、教師の真摯な態度を問われることにもなる。しかしそれが、担任と子どもとの信頼関係を培うことにもなるのである。

多感な時期である子どもたちが担任の考え方や思いに触れることは、自分の生き方や考え方を変えたり深めたりするきっかけになることがある。教師の言葉は、子どもの内面形成に大きく影響することもあると認識しなければならない。トラブルを解決するときだけでなく、子どもに気付かせたいことや深く考えさせたいことがあるときには、こころに響く担任の熱い思いを語りたい。

第2節 家庭とつながる

家庭に働きかけるとき、大切なのは、家庭内に立ち入るといふ捉え方ではなく、家庭と学校とが何で連携・協働すれば、子どもたちの成長を促すことができるのかという考え方である。両者は、子どもの健やかな成長を願う者同士である。それを根拠として、双方向の連携をすることが、以前にも増して重要になってきた。

6年2組では、家庭への情報発信のツールとして学級通信を活用することを重点的に取り組んだ。学級通信には、学級の様子を知らせるだけでなく、家庭との交流を豊かにするという働きがある。家庭とのネットワークをつくることは、子どもをより広く深く把握でき、学級の教育活動への協力も得やすくなる。家庭とつながった広く大きなネットワークで子どもたちの育ちを支えていくことが、これからの学級経営のあり方ではないだろうか。

おわりに

学級を学習集団に育てるための学級経営には、何よりも「子どもを知る」ことが大切である。「子どもが分からない」という前に、子どもを知ろうとしているだろうか、自分に問いかけることを忘れてはならない。一人一人の思いや背景を共感的に理解しようとする担任の態度に、自分や友だちが大切にされていることを感じ取り、子どもたち自らが、温かいふれあいや高め合いのある学習集団に育っていかうとするに違いない。